
大伴の名の下に！

霜雪院竹夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大伴の名の下に！

【Nコード】

N9620Z

【作者名】

霜雪院竹夫

【あらすじ】

注：この物語は受験の鬱憤を晴らすために推敲されております。

十五歳の品川敬嬢は、日本生まれ、韓国育ち。日本の何処の『衛府市』に住んでいた彼は、小三の時以来の帰郷を果たすことに。

ところが、そこに向かうはずが、衛府行き駅のホームに、春から通うはずの『衛府東高校』の制服を着た美少女がいて……？
「敬嬢……さんですか」「いや、先輩なんでしょ？敬語は無いですよね」「……っ」

地の字が足りない作者が送る、やけに背の低い少女・大伴絢佐と

その仲間達が繰り広げるドタバタコメディ！

第? : ?

向かい側から荒い息が聞こえて俺は窓から視線を少女に向けた。
大伴絢佐。一つ上の先輩（自称としておこつ）。衛府東高校に通
っているらしい。高校生のわりには背が若干低い感じもしなくはな
いが、ここは抑えて言わないでおく。

なんか怒るとやだし。

それから（漱石風）。

その少女　　大伴絢佐はぜーはーぜーはーしている。あまり・

・かわいくない。

普通にしていれば人気がありそうな女の子だと思う。俺じゃなく
てもきつと。流石に見惚れるような感じではないが、あの子可愛い
なぐくらしいな雰囲気纏っているのは確かなことだ。

この短髪の黒い髪の女の子と手を繋いで走ったのを思い出し、思
わず体が熱くなる。右手を無意識に眺めた。

うわー。本当に何やつちまったんだろつ。今になって罪の重さを
知った気がする。

.....

昔の遊びを思い出した。嫌な思い出だ。

あれは・・・八年も前かなあ。たしか奈帆が・・・

「け　　品川さん。・・・・品川さん。・・・・

品川サン」

「へ?.....あ、絢佐さん。なんですか?」

「何って.....なんか可笑しな顔してましたよ」

絢佐が笑う。初めて見て嬉しい気分.....が一瞬したの
だが、頬が引きつっているのから考えていくと、やっぱり引かれて
いる。うん。苦笑いという奴だ。

思わず引き締めた顔　　勿論引きつってはいない　　をして、

絢佐を見る。

.....

.....

目を逸らされた。心なしか、顔を染めている。

無駄に傷ついた。俺の人格を否定された感じだ。ひどい。ひどすぎる。

こんなにも傷つくなんて。無視されただけで。変わった.....のかもしれない。

まもなく、衛府駅に到着します。後降車の準備を整え下さい。

車掌のアナウンス。濁った声。おじさんだった。

「あ、もう着くのか。短いような、長いような.....って感じだよなあ」

「.....そうですね。案外近いのかもしれませんが」

絢佐が反応してやけにしみじみと云った.....いや、言った。なんか昔の人みたいだった。まあ、無視されなかったことに関しては万歳だなあ。

駅に近づくにつれ、車両がゆったり減速。俺は固い鞆の違和感と自分の体温で温くなったスーツに不快感を覚えつつ立ち上がる。ブレーキが掛かってガツクリと慣性が働く。

衛府、衛府。本日は衛高線をご利用頂き真にありがとうございます。ございました。

だみの車掌ボイスと共に電車が停止し、ドアが開いた。

何人かの客を先に降ろさせて、俺・品川敬壊と大伴絢佐はホームのコンクリートに足を踏み出した。

新たな一歩。

無駄にかっこいい台詞に感じられた。

が、確実に俺の目の先にある。

衛府市。

本当の意味で俺の修羅場がある。

まず、杉原奈帆の母・文江さんにご挨拶。

そして、奈帆本人に。

更に、同居することになるであろう人たちに。

．．．．．疲れるなあ。この作業は。

こいつが就活か（違うけど）？ある意味で母・祐里子の言葉は間違っていないかな。

「敬嬢さん。急がないんですか？文江さんが待ってますよ」

ひとり、ボくっとしていたらしい。数十メートル先に絢佐が半眼で言ってきた。

ああそうか、文江さんが．．．．ん？

．．．．んんん？

「絢佐さん、今なんつった？」

「え？なんのこと？」

目を逸らしている絢佐。

「今なんて言いました？」

「．．．．急がな」

「その後」

「いのか．．．．」

「もつと後」

「文江さんが待ってますと言いましたすみません」

絢佐がなんで高崎にいたのか。

なぜ 今まで突っ込まなかったけれど 俺のことを『け・

・品川さん』と言ったのか。

衛府東高校の制服を着ていて気がつかなかったけれど。

なんとなくパツと浮かんだ名前が『アヤ』だったことも。

大伴絢佐という名前がなんとなく、どことなく記憶の中に有った気がしていたのも。

だった。

対称的に並んだ二つの街の特徴について尋ねたはずなのに。全然違っていた大都市の様子に疑問を感じたはずなのに。

今でも、この意味は分からない。

私がそれでも高校に入るまでに成長できたのは、やはりあの声だろう。あの声が無かったとしたら、私の心は完全に塞がってしまっていた可能性はある。大有りだ。

「大伴さん。今日暇？」

男子生徒に声を掛けられたのは、五月の、若葉が目立つようになってきたころだったか。

校庭の桜の新緑を休み時間ただ眺めていた私の、初めての質問だった。

最初は、違う人なのだ、と思った。オオトモ、と読む名字の方が他にいたのかもしれない。大友さん・・・大伴さんはないとしても、もしかしたら『大殿』さんとか、そんな人がいたのか・・・と。

でも、違ったらしい。

「・・・大伴さん？訊いてる？」

「え？」

え、が私の第一声。クラスメイトへの、初の言葉。

「・・・あれ？聞こえてなかった？・・・あ、無理にとは言わないからさ・・・今日の放課後、時間あるかな・・・なんてさ」

その男子児童の周りには三人くらい男の子がいた。

「おい、敬。何無理やり誘ってたんだ」

大柄な子が言う。

「そっだけ品川」

瘦せた眼鏡の少年が続ける。青いシャツの三人目の子もコクコク頷く。

男子生徒・・・話掛けた子は「そうか」と呟いて元の位置に戻る

うとする。

「……そのとき……なんて言ったのか。肝心なことを忘れていた。もしかしたら、恥ずかしいあまり、自分の記憶から追い出したのかもしれないかった。」

とにかく、何か言った私に、四人は驚いて、それから、笑った。なぜかそのことは鮮明に記憶にある。

その日、私は今まで経験してこなかったようなことに出会った。それは仙人に突然遭遇したような感覚だった。

品川敬壤。

初めて声を掛けてくれた『友達』。

そして、三人の男の子。

少年野球でキャッチャーをしていた体の大きい、佐々木陽くん。

佐々木くんとバッテリーを組む無口な、芳村武蔵くん。

眼鏡を掛けていてほっそりした体つきの、大江冬暮くん。

四人は衛府を案内してくれた。知らないような駄菓子屋。裏路地。最後には秘密基地まで。

「おい佐々木、そこに貯金箱無かったか？」

「あったぞ。……にしても敬、これ何円入ってるんだ？相当の量だぞ」

「ん。……この秘密基地の入場料を入れている」

「マジ！？俺金無いよ！」

「……それは武蔵の冗談だ」

四人はとつても仲が良い。飛ぶように会話ラッシュしていく。

くすつ。

思わず笑いが零れた。

そんな私に、静まる四人。

「……………笑った」

誰かが言った。

「初めて笑いましたな」「笑った!?!」「……………へえ」

一旦の沈黙。

沈黙。

沈黙。

そして。

……………笑いの渦だった。

私のここでの、いや、人生初の、大笑いだった。正月の初笑いじゃないけれど。でも、そのくらい、私の衝撃的出来事。彼らは知らないだろう。私は今まで肉親にすら笑うことがほとんど無かったことを。

……………品川敬嬢が韓国に行ったのはそれから一週間後。

私は知らなかった。ずっとここにいるのだろうと思っていた。

過去に何回振り返って考えただろう? ……本当に、私は自分勝手だった。自分を中心にして周りの様子を考えていただけだった。まるでコンパスで描いた半円。

実際は、大きい円で。しかも、複数あったのに。

自分の見た……………いや、描いた五十%だけの世界を、全ての生活だ、と。

そう考えていた。

今さえ、そうだと思う。

品川敬嬢を騙した。きつと彼は気にしていないと言い張るだろうが、私はそうは思わない。それは建前だ。本音ではない。……
・騙したのだ。

俺は、そんなことどうでも良い。
そんなことで怒ったりしないよ。

そういうことを言われるのは嫌。絶対に。
たとえ、神様が私を見捨てたとしても。

あの後。

私は徐々に衛府という環境に慣れていった。
友達も増えた。

奈帆ちゃんや……みかんちゃん、つきみちゃん……………。

中学に行つて、そしてあつという間に受験。

あの三人の男子　　佐々木くん、芳村くん、大江くんは、衛府
東高校ではなくて、野球の強い衛府工業中央高校……通称『衛
業』に行つた。三人は野球を高校でやっているだろう。

案外、衛府市は狭そうで広いのだ。

少なくとも……。

謝りたい。

あの、敬嬢さんに。

初めての、友達に。

あの、前を歩く、あの背中に。

第?…?(後書き)

第? ひとまず終了。たぶん

「ああ、なんだこのふざけた奴」
と思ってくれたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9620z/>

大伴の名の下に！

2012年1月4日01時52分発行